澤田瑞穂著

佛教と中国文学

国書刊行会

さわだ みずほ
澤田瑞穂

明治45年　高知県生まれ
昭和9年　国学院大学高等師範部卒業
昭和37年　天理大学教授
現　在　早稲田大学文学部教授
専　攻　中国文学
著訳書　『中国の文学』(学徒援護会)、『地獄変』(法蔵館)
『校註破邪詳弁』(道教刊行会)、『列仙伝・神仙伝』
(平凡社)『増補 宝巻の研究』(国書刊行会)、その他
現住所　〒188 東京都田無市向台町1—12—8

佛教と中国文学

昭和50年5月20日　印刷
昭和50年5月30日　発行

定価 3000円

著作権者との
申合せにより
検印省略

著者　澤田瑞穂
発行者　佐藤今朝夫
製作・割田剛雄

東京都豊島区巣鴨3—5—18
発行所　株式会社　国書刊行会
電話 (917) 8287 (代表) 振替・東京65209

落丁本・乱丁本はお取替いたします。　印刷・八光印刷　製本・光洋社

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

題記

中国の仏教文学は、翻訳の文学と創作の文学とに大別することができる。翻訳の文学とは、いわゆる訳経文学で、梵本や胡本の原典を漢語に訳したものであるから、原籍からいえば、それはインド文学もしくは西域胡語文学であって、土着の中国文学ではない。しかし梵語・胡語による原本の多くは翻訳完了とともに棄てられてしまい、また当時でも原語を解するものは限られた少数の渡来僧または留学経験のある訳経僧だけであったから、これを経典として受け入れた多数の仏教徒にとっては、仏陀は漢語をもって法を説き、経典は漢文をもって述作せられたと同然に考えられたのである。従って、仏典のもつ題材と文体とは、仏の金口という宗教的権威と相俟って、新鮮な印象を与え、それが一方では道家経典の製作を促すとともに、一般の中国文学にも新しい形式と内容とをもった作品を産み出す力となった。原典の選択、訳場の組織、翻訳進行の制式、訳語の吟味、文章潤飾の程度および文体の影響などの訳経文学に関する諸問題は、単に仏教史学だけでなく、中国文学史のなかでも翻訳論として検討しなければならないものである。

創作による仏教文学は、確実に中国文学の領域に属する。それは絶対帰依の信仰に由来する宗教文学で、古代の漢文学に見られない特質をもつものである。源泉となる自己（作者）の信仰心が、どの方向をさして流出するかによって、発想の面からこれを次の三類に分けて考えることができる。

その一は対三宝（仏法僧）の文学、すなわち讃頌の文学である。三宝に帰依頂礼して、その威徳を頌するとき

に、仏徳をたたえた讃嘆の歌曲や、仏法の深甚微妙を詠じた詩文や、高僧の所行、善人の往生を伝えた文学が生まれる。浄土門にはこの種の作品が多い。

その二は対自己の文学。心の方向が、みづからの内面に向って集中されたときに生まれる自内証すなわち自証の文学である。多くはわが解脱悟道の心境を外界の万象に託し、比喩的・象徴的な手法で表出するもので、禅匠の偈頌（げじゅ）・語録・法語など、いわゆる禅文学がこれに属する。中でも偈頌は詩の律絶に相当して篇幅の短いのが常であるが、その文学的緊密度はきわめて高く、いわば禅文学の精粋である。「不立文字」とはいうけれども、実際は言語を離れた禅はない。唐の宗密が「禅なるものは諸善知識が述ぶるところの句偈なり」（禅源諸詮集都序）といっているのは、詩句による言語表現そのものが中国禅の特徴であることを端的に道破したものである。

その三は、不特定多数の対者を指向する対世間の唱導文学。仏法弘通のために、讃頌と自証との前二者を転じて世間の凡庶に廻向するもので、禅と浄土と他の法門とを問わず製作せられた。これは文学として形成される以前には、大抵は実際の法儀にかけて演出されたもので、一面には法儀文学の性格をも具えている。その末流は多く下級の宗教者によって演ぜられるため、宗教以外の世俗の芸能や文芸との交渉も起ってくるので、讃頌文学・自証文学の比較的直截なのにくらべると、はるかに広い領域との関連をもつ。中国文学史研究の興味ある主題の一つである。

本書は、筆者が年来関心を寄せてきたところの「中国文学に及ぼした仏教の影響」乃至は「中国俗文学中の仏教的要素」ともいうべき分野に関する論考を集めたものである。前述の中国仏教文学の三分類によれば、大半は第三の唱導文学に属するものであるが、書名はやや広く『仏教と中国文学』とし、同類の道教系統の俗文学および伝説

に関するものも併せ収めた。

筆者はもとより僧家の出身でもなく、また仏教学を専攻したこともないから、この方面についての素養はもたない。ただ、中国文学の一学究として、中国文学史の立場から、仏教の翳覆するところの影を捉えようとすることには、興味というよりも責務のようなものを感じてきた。僧院の奥ふかく、出家人によってひそかにつくられた詩偈や法語は、たしかに宗教文学としての重要さをもっているが、その鑑賞や評価だけでは事は終らない。それが世間に流れ出て、どこのように一般世間人の心に沁みこんでいったかという過程こそ、文学史の研究に携わるものが明かにすべきことだろうと思う。仏教文学の世間的な広がりと機能と、そして中国文学史全般に与えた影響の量と質と形とを究めること、言いかえれば、仏教の波が中国の文芸に向って繰り返し打ちよせた、その渚の一線をたどること――これが筆者の早年よりの課題であり、またこの『仏教と中国文学』の立場なのである。

旧稿を再録するにあたり、いささか苦慮したのは、その再録の方法についてである。というのは、公表の年次が、古きは昭和十三・四年代の旧作から、近年発表のものに至るまで、前後三十数年の長きにわたっているため、その後に発見された新資料や諸家の新研究を加えて、すべてを現在の段階において統一しようとすれば、もはや部分的な改訂だけでは済まず、全体の論旨にまで及んで、ほとんど全面的に改稿するよりほかはない。それは改稿というよりも、別個の一篇になるであろう。

しかし過去の論著は、その時期に発表されたということが、また一種の研究史的意義をもつ場合がある。なまじ弥縫して原文を紊すことは、不徹底に終るばかりでなく、かえって読者に誤解を与える惧れもある。それならば、やはり過去に引戻して、原文のままに再録するに如くはない。

もとより旧稿がすべて研究史的意義をもつなどと自負するつもりはないが、上述の事情や得失を考慮し、今回の

再録にあたっては、戦前公表のきわめて初期のものはすべて原載のままとし、その後のものは、本文に若干の加筆をするか、もしくは篇末に附した「補遺」をもって本文の加筆に代えた。左に所収各篇の原載年月・掲載誌および収録に際しての異同を記しておく。

「唱導文学の生成」。原題「支那仏教唱導文学の生成」。昭和十四年十一月、筆者の二十五歳か二十六歳のころの旧作。本文第四項「寺院唱導の大成」までの前半は、昭和十四年十二月、智山専門学校発行「智山学報」新第十三巻に掲載された。翌年の春に筆者は北京に渡り、後半は十五年十二月の新第十四巻に掲載された。この方面における筆者の第一作で、青年らしい未熟で気負った筆致は、いま読み返すと気恥かしいくらいのものである。殊に敦煌発見俗文学資料の研究は、神田喜一郎博士の『敦煌学五十年』にも見えるとおり、その後に長足の進歩を遂げ、続々と諸家の雄篇が発表され、今日なお新進学徒によって発表されつつある状態である。これらの成果を悉く斟酌して補訂することは、あらたに別の一篇を成すことであるから、今回は誤字や不適当な字句の訂正のほかは、すべて原文のままに収録した。

「十恩徳と十報恩」。原載、昭和三十九年一月、天理大学中国学科研究室発行「中文研究」第四号。

「永楽仏曲」。昭和三十年十二月、「跡見学園国語科紀要」第四。「補説一」に若干の加筆をした。

「明季緇流曲家散木湛然禅師事蹟」。昭和三十四年三月、「天理大学学報」第二十八輯。本文中に若干の加筆をした。

「釈教劇叙録」。昭和三十九年六月、「天理大学学報」第四十四輯。

「魚藍観音」。昭和三十四年十二月、「天理大学学報」第三十輯。本文に若干の加筆をした。

「三教思想と演義小説」。原題「三教思想と平話小説」。昭和三十五年六月、天理図書館発行「ビブリア」第十六号。原題中の「平話小説」は年代的に妥当でないと考えて「演義小説」に改めた。

「達摩伝小説」。昭和三十九年三月、「ビブリア」第二十七号。

「済顛酔菩提」。原題「済顛酔菩提について」。昭和三十五年三月、「天理大学学報」第三十一輯。本文に若干の加筆をした。

「蓮池大師伝の弾詞『九品蓮台記』について」。昭和四十四年一月、「中文研究」第九号。

「唐三蔵の出生説話」。原題「唐三蔵の出生説話について」。昭和三十五年十一月、『福井博士頌寿記念東洋思想論集』。本文および注に加筆した。

「畜類償債譚」。昭和四十三年六月、仏教文学研究会発行『仏教文学研究』第六集。京都・法蔵館刊。「補遺」によって資料を追加した。

「道情に就いて」。これも戦前の旧作。昭和十三年十一月、中国文学研究会発行「中国文学月報」第四十四号。原文のままに再録した。

「道情考補遺」。昭和四十五年九月、「天理大学学報」第六十八輯。「追記」を加えた。

「韓湘子伝説と俗文学」。昭和四十五年五月、泰山文物社発行「中国学誌」第五本「道教専号」。今回「補遺」を加えた。

「神仙説話の研究」。昭和四十五年三月、「天理大学学報」第六十六輯。「補遺」を加えた。

〔附録〕「天理図書館所見道書私録」。昭和四十二年十月、日本道教学会発行「東方宗教」第三十号。

これ以外にも、宝巻文学に関するものとして、「金瓶梅詞話所引の宝巻について」（昭和三十一年十月「中国文学

報」第五冊）や「宝巻と仏教説話」（昭和三十九年七月「仏教史学」第十一巻三・四合刊号）があり、本書に収めてよいものであるが、宝巻については別の一書を予定しているので保留した。

本書の編刊は私かに腹案としてもっていたものであるが、なお書き足したい稿もあり、逡巡していたところ、国書刊行会編集部の勧請により、今回思いきって既発表稿を整理し、一書として公刊することにした。国書刊行会の好意ならびにこれを同会に慫慂された大正大学吉岡義豊教授の友情に謝意を表するものである。

昭和五十年五月

西郊田無市の清観廬において

澤田　瑞穂

目

次

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

一　唱導文学の生成……1
二　十恩徳と十報恩……67
三　永楽仏曲……79
四　明季緇流曲家散木湛然禅師事蹟……101
五　釈教劇叙録……115
　一龍居士劇　二野猿聴経劇　三香山観音劇　四仏涅槃劇　五那吒太子劇
六　魚籃観音――その説話と文芸――……143
七　三教思想と演義小説――潘鏡若撰『三教開迷帰正演義』について――……163
八　達摩伝小説――朱開泰撰『達摩出身伝燈伝』について――……169
九　済顚酔菩提……177
十　蓮池大師伝の弾詞『九品蓮台記』について……199
十一　唐三蔵の出生説話……211
十二　畜類償債譚……229
十三　道情に就いて……259

十四　道情考補遺……271
十五　韓湘子伝説と俗文学……291
十六　神仙説話の研究……327
附録　天理図書館所見道書私録……359

一　唱導文学の生成

伝道は脚と口とを以つて開始せられる。脚は口を載せ、口は金言を宣説する。金言は文芸の形をとり、耳を通じて世俗をたのしませつつ拡播されてゆく。ここには伽藍も経疏も必要とせずして、しかも甚深微妙の大法は四方に遍満する。これを唱導といふ。伝道史は一面には文芸の歴史であつた。これはあらゆる宗教を通じてかならず践まれなければならない開教史の一段階である。一国に於いて自然に発生した宗教でも、その伝道に際してはなほこの方法によらざるを得なかつた。いはんや支那仏教の如く西域南海の異方より新伝し来つた宗教ではこれは当然考へられる問題であらう。しかるに後世の発達せる仏教のみを知り、蔵経閣裡に日夕蠹魚と相交はることをなす者はこの理を察せず、その開教の如きもはじめよりして一切の経論がこれを管掌したかの如く考へてゐるらしい。八万四千といみじくも算へあげた外になほ幾千百万の法門があり、紫衣燦爛として獅子座の上に立ち給うた高僧碩徳の慈眼にもなほ映じきれない無数の人生があつた。茫漠たる世俗の曠原に向うて、経堂の奥深く紙魚の棲家と蔵せられた一切経の文字が、そもそもいつの間に足を生やしてやすやすと世間に拡まり得たであらうか。一部の上流階級はいさ知らず、国民の大部分を占める庶民階級と浮屠の教との交渉はすくなくともこちたき訳経に於いてではない。経典が訳されたから仏教も民衆に拡まつたといはうがためには、まづ張三李四の徒も一切経論を読破するの力があり、かつ実際にもこれを読破したといふ前提と証明とが必要であらう。これは国民教育史の事実をなみするもので

ある。悠悠たる無智無識の凡庶、経論の之乎者也矣焉哉と何の関するところがあらうや。おのれ文字を知るが故に人もまた文字を知ると忖度する、これ平生文字に親しむ者の陥りやすい錯覚であり、人間文字になづむの憂患ではあるまいか。経典が直接に凡庶と交渉することはほとんど稀であつた。かならず両者を媒介する者あって交渉したのだ。その媒介者と媒介の工具とは人多く卑視しあるひは無視して顧ることをしない。大法天下に遍照して草莽の甿庶もなほ微妙の法を与り聴くを得たのは果して選ばれたる少数の精英（エリート）の力であつただらうか。自分などはさうは思はない。俗人史観といはれるかも知れぬがどうしてもさうは思へないのである。自分の如き、いまだ髪を剃せず緇衣を纏はず精舎にも住せざる在家一介の俗人が、あへてこの支那仏教史の一辺に黄嘴を挿まうとするのも、一には忘れられたる仏教媒介者の功業とその工具の効果とを顕彰し、併せて在家俗衆のひそかなる信仰をも窺はんと欲したからである。ただ仏史諸般の専門智識に至つては到底諸徳の塵垢粃糠にも及ぶはずはない。江湖の勝流幸に一粲して教正を垂れたまへと云爾。

一　行乞・神異・呪願——唱導文学の播種期

流入の胡僧やうやく漢地に数を増して、僧伽成り寺塔建立せられるに至つても、そのわづかな根拠地を以つてみづから賈を待つの態度をとつてゐては大法の弘通は到底思もよらない。かならず進んで僧伽を出でて衆心開導のことに従はなければならぬ。ここに行乞といふことがはじまる。漢代のことは寂寞として聞ゆるなきも、沙門にして乞食をなした例は慧皎の『高僧伝』に拠れば、仏陀跋駄羅すなはち覚賢が弟子の慧観とともに乞食をなし（巻二）、康僧淵も清約を以つてみづから処したが、常に乞食してみづから資し、人いまだこれを識らなかつたとある（巻四）。

この類のことを挙げれば、于法開は食を乞ひて主人の家に投じ、その家の病婦を医療した（巻四）。竺曇猷は嘗て行きて一行蠱の家に至り食を乞ふ（巻十一）。釈道法は常に分衛を行ひ別請及び僧食を受けず乞ひて得るところは常にその分を減じて以て虫鳥に施した（巻十一）。釈慧力も来りて京師に遊び常に蔬食を乞ひ、ねんごろに頭陀して福を修めた（巻十三）これらの高僧にしてすでにかくの如くであつたとすれば他の庸僧は推して知ることが出来よう。宋の沈約の『述僧設会論』（「広弘明集」巻二十四）にいふ

今既取二足寺内一、行乞事断、或有二持レ鉢到レ門、便呼為二僧徒一、鄙事下劣。既是衆所二鄙恥一、莫二復行乞一。悠悠後進、求レ理者寡、便謂求乞之業不レ可二復行一。

行乞が鄙恥せられるに至つたのは、僧徒ならざる一般乞丐がこれを奇貨として僧徒の業を模し、遂に両者の混同を来したからである。これは後には専ら沙門にあらざる寺院奴隷や無頼の閑徒や普通の乞児の管掌するところとなつて漂泊の行乞芸を産み出した。乞丐と唱導勧化とは言語の上からも関係がある。今日俗語で乞食のとこを花子といふが、明の謝在杭すでに意味がわからぬというたものを今説くのは危いけれど、思ふにこれは勧化する者の意で、教化子または抄化子から転じて叫化子――化子――花子と変じていつたものである。これは乞丐と唱導僧との混淆した結果だ。新年などに乞児が祝福の語を唱へて門戸を廻ることは支那にも段段と例がある。日本でもほかひの業が仏教と合して地神経読の盲人や唱門師や高野聖や歌比丘尼等の唱導者を出してゐる。正史や僧伝に見えないからとの理由でそんなものはなかつたとはいへないのである。

脚による行乞はかならず何事かを伴ふ。酬報するものなくして単に食のみを乞ふことは出来ないのである。まして沙門の目的が食になくして弘法にあつたとすれば何かを行はずしては済まないはずである。伝道に於ける最初の手がかりはまづ民衆の耳目を眩惑してその好奇心を挑発し、次いでこれに従ふの利なることを覚らしめ、遂にその

信服を得ることである。教理宣説の如きは実はその最後に於いてはじめて行はれる。元来道仏いまだ判せず、沙門と巫祝と同一視せられた漢晉の候に於いて、民衆の怪訝と白眼の裡に真向からの説法が受け入れられ理会されるはずはない。まして難解なる経典の如きは、文字なき一般の愚民にとつては半文の銭にだも価しないのである。民衆の信服を得るのはじめは沙門の呪術秘法によつて神異霊験を示すことである。吉支丹宗門の本邦に伝来するや、いはゆる伴天連の異法ケレンの秘術によつて開教の第一歩とした。仏法の漢地に入るもまた同じである。僧伝の類を閲するに、流入の胡僧が至る処で呪術をなして神異を示したといふ多くの記事に接する。たとへば東晉時代に仏図澄の如き異僧が渡来して呪術秘法によつて神異を示し、民間信仰を誘発して仏教弘通史上に大きな貢献をしてゐる。しかも澄は訳経には与つてゐないのである。帛尸梨蜜多羅も江東にはじめて呪法を伝へ、また曇無蘭・曇無讖等も多く呪術を以つて験を示し、その感化によつて仏教の民間普及を贏ち得てゐる。

呪術のことは僧伝の神異篇上下両巻を中心として各篇に散見するが、今これを二大別すると、目的を有するものと目的を有せざるものとの二種である。後者は単に奇術神験を示すのみで一定の目的を有せず、むしろ西域幻師の幻術にも近い。たとへば仏図澄はよく神呪を誦しよく鬼物を役使す、麻油を以つて胭脂にまじへて掌に塗り、千里の外のことみな掌中に徹見し対面するが如し。また鈴音を聴いて以つて事をいひ、効験あらずといふことなし。あるひは応器を取りて水を盛り、香を焼いてこれを呪するに須臾にして青蓮を生じ光色目を曜すと（「梁伝」巻九）。これはほんの一例にすぎない。これに対して前者の目的を有するものには呪治と呪雨とがその重なるものとなつてゐた。呪治は医療であつて、かならずしも神異を伴つてはゐないが、これを見る愚民にとつてはやり神の如く感じたであらう。今その数例を挙げると、仏図澄の伝に、時に痼疾あり、世によく治する者がない、澄ために医療すれば時に応じて瘳損す、陰に施して黙益する者あげて記すべからずと。訶羅竭の伝に、晉の太康九年暫し洛陽に至

る。時に疫病はなはだ流り、死者相継ぐ、竭ために呪治し十に八九を差やすと（巻十）。于法開の伝に、開は耆婆を祖述して医法に妙通し、嘗つて一病婦を呪治した。「法師は高明剛簡なり、何ぞ医術を以つて懐に経るや」とのある人の問に対して、「六度を明かして以つて四魔の病を除き、九候を調へて以つて風寒の疾を療す、みづから利して人を利するまた可ならずや」と答へたとある（巻四）。竺法曠も神呪をよくし、東土多く疫疾に遇うたとき村里を遊行して百姓の危急を拯急し多くこれを祈りて効を致したと（巻五）。竺道邃も方薬をよくしたといひ（巻四）、また耆城の伝にも、浄水一杯、楊柳一枝を取り、楊柳を以つて水を払ひ手を挙げて病者に向つて呪すれば両脚攣屈した病人をも起ち行かしめたとある（巻九）。呪治の際に楊枝を取つて呪したことは仏図澄の伝にも見えてゐる。呪雨とは呪術によつて雲を呼び龍を招き雨を降らしめることであつて、これまた医療と同様に民衆のまづ渇望するところであつた。その実例は求耶跋陀羅（巻三）・竺法曠（巻五）・釈慧遠（巻六）・仏図澄（巻九）・渉公（巻十）・釈保誌（巻十）釈曇超等の各僧伝に見えてゐるからここでは一一詳には記さない。祈雨の術は後に完成されて密教の請雨法となる。

以上の如き呪術神異の中心となり法力の根源となるものは呪願であり呪語である。呪語とは呪術の音声言語に現はれたものである。呪語とは一定の声音と音韻と意味のまとまりとをもつてその言霊を風散し、人間・精霊・神仏等の対者を感染誘致して自己の意の如く動かす工具である。仏教に於いてはいはゆる曼怛羅・陀羅尼を口誦することで、漢地に入つてもすでに呉の支謙訳『華釈陀羅尼神呪経』があり、また同時代に失訳『仏説持句神呪経』『仏説八吉祥神呪経』がある。帛尸梨密多羅は『孔雀王経』を訳してはじめて江東に神呪を伝へた。曇無蘭も『時気病経』『呪歯経』『呪目経』『呪小児経』『龍呪水浴経』『請雨呪経』『止雨呪経』『薬呪経』『呪毒経』等の諸経を訳出してゐるが、これらはその目を見ても知られるとほり、仏教の教義とはほとんど関係のない医療・祈雨・止雨の呪言

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com